

2026年2月4日

校長 岡 利道

部活動 点描 ～放送部～

新年となって第2弾は、放送部さんです。放送部さんは主に、学校行事の司会や音響、校内放送を行っています。

部員は、3年生4名、2年生1名、1年生3名です。活動の拠点は視聴覚準備室で、毎週木・金曜日、夏休みや冬休みには、卒業した先輩を講師として呼び、アドバイスをもらっています。顧問は、重富陽太教諭、光石千夏教諭です。

体育館で行われる式や集会の際には、全体が見渡せる体育館ミキサー室から音楽を流したりマイク音量の調整をしたりするなど、大事な役割を果たしています。校内放送の時は、視聴覚準備室がまさにスタジオとなります。

個人的な意見ですが、お昼の放送コーナーを楽しみにしています。特にリクエスト曲でどんな歌手の唄が流されるか、何時も興味津々です。生徒と世代間ギャップはありますが、どんな曲が好まれるのかを知ることにも楽しみにしているんです。



現在の部長である笠松真帆さんに聞いてみました。

Q：やりがいは何ですか？

A：特に9月の文教祭のオープニングイベントで裏方を務め、終わった時に、みんなの喜んでくれた顔を見て「よかった！」と思います。

Q：苦労もあるんでしょう？

A：ミキサーですね。音量調節がとても繊細なものなので、難しいです。音楽を流す時、CDを切り替えるタイミングなんかも気をつかいます。

いやはや、はたで見ているのとは大違い。大変なんですね。文教祭が特に印象に残っている様子でしたので、笠松さんにツッコミを入れてみたところ…。

Q：文教祭では、どんな感じでしたか？

A：オープニングイベントは、1週間ほど前にリハーサルをしますが、本番になると、その通りに進まないことが多いです。幕を引くタイミングとか、出演者とのやり取りとか、部員同士でインカムを使ってズレを調整していきます。

なるほど。見えないところでそんなドラマがあったなんて！



※この写真は、令和7年5月9日(金)の新テニスコート・オープニングイベントが行われた時に、司会進行の任務をすることになった放送部員さんたちが、顧問の先生方と事前打ち合わせをしているところです（別の場所で動いている部員さんもいます）。



生徒朝会の時も、体育祭の時も、もちろん式の時も。放送部さんの支えによって成立しているんですね。本当にいつもありがとうございます。

昨年末に行われた「第35回可部地区青少年意見発表大会」の司会・進行も放送部さんが担当しましたが、そういった対外的な活動へも今後どんどん参加したいと、笠松さんは張り切っています。アナウンスの音がしっかりと聴く人に届くように、日常活動で発声練習をおこたらず、努力し続ける放送部の皆さん。これからも、よろしくお願いします！

3 学期始業式での挨拶

今学期の始業式にもどりますが、私は次のようなことを生徒の皆さんに話しました。保護者の皆様にもご一読いただければ幸いです。



新年明けましておめでとうございます。今年も、よろしくお願いします。

今年の干支は午（うま）ですね。力いっぱい1年を駆け抜けたいですよね。

ところで、つかの間でしたが、あなたの冬休みは如何でしたか？ ちっちゃくてもいい、あなたならではの思い出を大切にね。

さて、新年最初のお話は、英語科のシャノン先生が関わっていますよ。今年の干支の午も出てきます。12月にフィリピンのLCICで海外研修があったわけですが、19名の有志生徒とともに、教員としては佐藤和史先生、シャノン先生、そして私も団長ということで行きました。

帰りの飛行機内のことです。詩（ポエム）の話になりまして、私が日本の詩であれが好きだ、これが好きだと話していました。「シャノン先生、あなたの母国オーストラリアの詩を、どれでもいいので紹介してください」と言ったところ、「The Man From Snowy River」（スノーウィーリバーの男）という詩と、作者のバンジョー・パターソンという詩人を紹介してくださいました。「帰国したら探してみます。ありがとうございます！」と言って、その場は終わりました。

帰国後しばらくして調べてみました。何と「スノーウィーリバーの男」という詩はオーストラリアの国民的抒情詩であり、バンジョー・パターソンはオーストラリアの国民的詩人だとわかりました。「荒野で生きる人間の強靭さ」「トライしていく勇気」「仲間を大切に作る心」と言った価値観が、オーストラリア人の精神にぴったりと重なるのだそうです。

長編の詩であり、とても全部は読めませんので、ここでは私がその詩を短めに紹介させていただきますね。主人公は若者です。映画の西部劇を想像してもらおうといいのですが、牧童（カウボーイ）がさっそうと馬を乗りこなす光景を思い浮かべてみてください。主人公の若者であるスノーウィーリバーの男は、経験は少ないものの、勇敢で決してあきらめない性格の若者です。人馬一体となって逆境に立ち向かう姿は、多くの人の共感を呼びます。

ずっと昔の、開拓時代のオーストラリアが舞台です。そろそろ鉄道ができ、機関車が走り始めたころ。まだ、人々の足となるのは馬が普通でした。ある町で、とても値打ちのある仔馬がいなくなって、連れ戻そうと、腕利きのカウボーイたちが集まってきます。仔馬は、野生の馬の群れの中に迷い込んだ。よし、俺が連れ戻してやるとばかり、ベテランのカウボーイは追っかける。

ところが、野生の馬たちが行った先は、何とも険しい岩山がそびえる場所で、カウボーイたちもしり込みしてしまった。それでも数人のカウボーイが山の頂上まで追い詰めた。見れば、少し下った先に、あの仔馬がいるではないか。でも、男たちは息をのんだ。いたるところに穴ぼこがあり、藪が行く手を阻む難所だ。ベテランのカウボーイも、さすがに下っていくのをためらった。

その時だ！ 後は、英語の詩の一節と、日本語訳を聞いてください。

But the man from Snowy River let the pony have his head
And he raced him down the mountain like a torrent down its bed
While the others stood and watched in very fear

だが、スノーウィーリバーの男は馬に身を任せ、
鞭を振り回し、歓声を上げ、
山を駆け下った、まるで谷を流れる激流のように、
他の者たちは恐怖に立ち尽くして見守った。

さあ、このスノーウィーリバーの男はまだ少年の面影を残す若者だし、乗っているのは普通の馬よりちっちゃなポニーで、いかにも頼りなさそうに見えるのですが、このあと、若者も馬も、血だらけになりながら仔馬を救い出し、たちまち英雄となるのです。詩だけでなく、物語の本としても出版されたり、ドラマや映画にもなったりしました。そのぐらい人気があるわけなんです。

午年にちなんで、シャノン先生からお薦めしてもらった「The Man From Snowy River」(スノーウィーリバーの男)というオーストラリアの詩を紹介しました。本校生徒の皆さん。心に太陽を、唇に歌をと私はよく言いますが、今回は唇に“詩”をと言ひ換えます。日本だけではなく、世界にも目を向けてみるのもいいでしょう。一編の詩から、勇気がもらえたり、心を癒やしてもらえたりしますよ。

今日は、3学期のオープニング。同時に午年の一年の幕開けです。一人一人がまずは3学期の目標を立て、フォーサイト手帳に記録して行って、日々向上していかれることを願います。3月1日には卒業式もありますね。それぞれのゴールに向かって、頑張ろう！



3学期の始業式があった日は、底冷えがして、ぶるぶる震えそうな天候でした。そのような場で、私がわかりにくい話をして、生徒たちのスタートの出鼻をくじいてはいけないと、ジェスチャーを大きくし、イメージがわきやすいように工夫したつもりです。

ここまでお読みいただきまして、本当にありがとうございました。そして、シャノン先生に、心より御礼申し上げます。